

診断の変化と経験の再記述

——うつ病から双極性障害へ——

一橋大学大学院社会学研究科・日本学術振興会 河村裕樹

1. 目的

本報告の目的は、当初うつ病と診断された患者が、後に双極性障害であると診断が変わったことに対して、どのように折り合いをつけてきたのかを、インタビューデータをもとに記述することである。ある診断が一度下されると、その診断に従って自らのこれまでの人生を再記述することで、「診断されるまでは全然病気だとも何とも思わなかった」と患者自身が述べるような状況に折り合いをつける方法を記述するということは、たとえば前田 (2009) において述べられてきた。それに対して本報告では、診断が変わることにより、一度下された診断に対して折り合いがつけられた経験を、新たに下された診断のもとに再記述していく方法を記述する。なおうつ病とは気分の落ち込みに代表され、双極性障害とは、気分の落ち込みと躁状態が出現する。両者は異なる疾病カテゴリーに分類され (DSM-5)、治療方法も異なる (うつ病に対して有効な抗うつ薬が、双極性障害に対しては、むしろ悪影響を及ぼす場合もある)。また原因として措定されている要因も異なり、うつ病が周囲の環境であるのに対し、双極性障害は遺伝とされている。

2. 方法

G. ライルから P. ウィンチを経てエスノメソドロジーにおいて経験的なプログラムとして結実した概念の論理文法分析を用いる。とりわけ念頭にあるのは、I. ハッキングの多重人格をめぐる議論である。ハッキングは北米において多重人格という新たな疾病カテゴリーが広まったことに着目し、自らの経験をかつては存在しなかった疾病カテゴリーの下で記述しなおしていくことで「多重人格者であることを自己成就的に確証していく」(浦野 2007) 現象をループ効果として論じた。本報告では、突然のうつ病診断により記述しなおされた経験が、双極性障害という診断へと変更されることで、経験のさらなる再記述が行われ、折り合いがつけられていくその方法に焦点をあてる。

3. 結果

診断が変わったことにより、参照すべき疾病カテゴリーがうつ病から双極性障害へと変化し、それに応じて経験の再記述がなされ、自らの経験を語る事が可能になっていったことが、インタビューを通して語られた。つまり語る内容が、概念の連関を参照することを通して変化していった。そしてその変化、すなわち新たな疾病カテゴリーと折り合いをつける方法は、患者自身による探索手続きに基づいていた。具体的には要因を周囲の環境に求めるのではなく、遺伝的要因を過去の経験のなかに見出していきことや、脳障害であるという知識を自力で得ることで、経験が記述しなおされていった。たとえば中学生の頃の記憶を思い出し、教師から「(むらっけがあつて) いったいお前はどっちのお前で判断しているのか」といわれたことを、躁うつ病の病状として記述しなおしていくという折り合いのつけ方が語られた。

また、うつ病と双極性障害は医学的には異なる疾病カテゴリーとされているが、本人にとっては、「うつ状態」を基底とした連続性があるからこそ、折り合いをつけることが可能となっていた。

4. 結論

ハッキングが論じたように、本報告でも参照すべき疾病カテゴリーが変化するのに応じて、経験の再記述がなされ、折り合いをつけていく方法が語られた。そして、「先天的 (遺伝的) / 後天的 (環境)」、「うつ病 / 双極性障害」といった医学的なカテゴリーを自らの経験に引き付けて解釈するという実践が行われていた。

前田泰樹, 2009, 「遺伝学的知識と病いの語り——メンバーシップ・カテゴリー化の実践」酒井ほか編『概念分析の社会学——社会的経験と人間の科学』ナカニシヤ出版。

浦野茂, 2007, 「記憶の科学——イアン・ハッキングの「歴史的存在論」を手がかりに」『哲学』117: 245-66.